

## 野生動物との共存。

最近、野生動物による被害が増えている。しかしこれは野生動物が悪いのではなく、人間の方に責任がある。ことに農林省の責任は大きい。

そもそも戦後日本が焼け野原になって国土が荒れたとき、農林省はスギの植林を進めてきた。スギは成長が早く、用材としてのみではなく、樹皮や小枝は炊き付けなどの燃料に、葉は線香の材料などにも利用できたからである。このためナラやクヌギ、クリなどの広葉樹を伐採して燃料として利用した後、スギを植林する事に腐心してきた。当時の燃料はマキや木炭が主で、ナラやクヌギは良質の木炭になったから、どんどん伐採されたのである。しかもスギの生育が思わしくない寒冷地では、スギに代わってカラマツを植えた。しかしこれが国土を一層のこと荒廃させる原因となった。カラマツはスギとは異なり利用価値は低く、振れが出るため用材にはなりにくい。またもちろん当時は予想も出来なかったのだろうが、円高により、材木は海外から輸入した方がずっと安価で、しかも燃料は石油に取って代わったから、日本の林業はまったく立ち行かなくなっただけか、山林は荒れるに任せ、クマやシカですら山林内では生息困難になって行ったのである。

★                      ★                      ★                      ★                      ★

もともとクマやシカやサルなどは、広葉樹林内に広く生息し、その果実や葉を食べて過ごす。ところが山林内には針葉樹ばかりで食べ物となる果実がない。このため雑食性の動物は人間の出すゴミに着目し、ゴミ置き場を物色するために、里に下りて来るようになったのである。北海道のヒグマですら同様に、早朝に生ゴミをあさりにやって来る。そして突然に人間と遭遇すると驚いて襲いかかったりすることも多く、運が悪い動物は猟銃で射殺される。

小生は碓氷峠で、2回ほどツキノワグマに遭遇している。両方とも小グマだったが、松井田町入山の里から1キロも離れていないあたりであった。一方、軽井沢では里にサルが降りてくるため、町の職員がサルを山へ追いやるため、毎日活動している。しかもこのあたりでもイノシシが多く、別荘地内のコケをめくり上げて、地中に潜むミミズを食べている。ミミズは地面をトントンとたたくと驚いて地面に顔を出す。容易にイノシシや鳥のエサとなってしまうのである。食物連鎖の最下層にあるミミズもこの自然界では、大事な役割を果たしているとも言えるのだろう。

★                      ★                      ★                      ★                      ★

そればかりではない。別荘地といわれている周辺は、とかく山林と山里との接点になっている地域が多い。もともと人間が永住するにはいささか不便なところが、近年、別荘地として開拓されてきたからである。那須高原や日光戦場ヶ原、蓼科高原などでは国道付近の車道を、シカやサルなどは数頭の家族連れで、人間を恐れることもなく闊歩している。シカなどは冬になると、ヤマザクラやヤマナシの樹皮

をはいで食料にするから、最近では枯れ木も目立つようにさえなってきた。軽井沢ではシカはもとより 1,000mを越えたエリアではカモシカがかなり街中まで姿を現す。軽井沢は特にカラマツが多い。戦後間もない頃からカラマツばかりを植林したためである。しかしカラマツは高樹齢にならないと用材としては使いにくい。伐採して用材になってからも、ネジレが出るために建築用材としては不向きなのである。したがって、樹齢の若いカラマツはパルプ用材にしかならない。マキにするにはヤニが多く、煙突がヤニだらけになって、煙突の繋ぎ目からヤニが染み出てくるためである。その上動物たちの食料にもならないから、動物たちは街中へエサをねだりにやって来るわけである。おまけにこうした観光地化されたエリアでは観光客が珍しがってエサを与える。日光でも軽井沢でも賢いサルなどは車の中にまで入り込んでエサとなる食料を持ち去る。しかも人間慣れしているから、ちょっとしたことでは逃げることもないのである。不幸なことにこうした動物が車との事故を起こすことも少なくない。シカなどは子牛ほどの大きさがあるから、事故になると車もシカも大きな損傷を受ける。

★ ★ ★ ★ ★

さらに悪いことには、こうした針葉樹は根を深く張ることがなく、地表近くを横へ這いながら背丈を伸ばしてゆく。このため風には極めて弱い体質になっている。ひとたび台風が来ればたちまち倒れて、信濃追分付近では 2004 年の台風 23 号で倒れたカラマツが、今でも見るも無残な姿をさらしている。信州だけではない。台風のたびにガケ崩れを起こすのは、どこもたいていはスギ林である。スギは根が浅いため、大雨が降ると表層部の地面もろとも崩れ落ちる。しかも日本の山岳地帯は表層部付近は落葉で黒土になっているものの 50cmも掘ったら、岩盤が露出して来るところも少なくない。さもないと黒土の下は火山灰地で、砂礫層であったり粘土質であったり、どこまで掘っても土が出てくるところは、実際のところ関東平野を初めとする大平野ぐらいなのである。このため台風による被災地の多くは、戦争直後に植林された斜面のスギ林であることが多い。

★ ★ ★ ★ ★

しかし広葉樹のナラやクヌギ、クリなどの樹木は、ドングリが実って地面に落ちて発根するとき、まず太い根を大地に突き刺すように伸ばして、それから子葉を出して成長を始める。かりに高さ 30cmのマツと、ナラを手で引き抜くとき、その力はナラの方がはるかに強いし、高さ 2mのナラを移植するのは並大抵のことではない。根が地中深く伸びているからである、しかもこうした広葉樹は根元から鋸で切ったとしても、脇から何本もの新芽を吹いて、まず枯れることはない。何年か後には必ず再生して来るのである。ところが針葉樹は葉や枝の出ていない根際部分から倒したら、まず新芽を吹いて再生することはない。

★ ★ ★ ★ ★

2014年8月末、広島で大きな被害と犠牲者を出した住宅地の裏山は写真で見ると限り、雑木の林になっているように見えるが、もしこの山がナラやクヌギ、クリの山であったなら、あれほどまでの災害にはならなかったような気がして、大変残念である。今からでも遅くないと思う。自然は人間とは比較にならないほどの長いサイクルで生きている。100年がかりで日本中にナラやクヌギやクリを植えてほしいと思う。クヌギ林にはカブトムシやクワガタがやってくる。ナラの葉を植樹として育つゼフィルスと称するミドリシジミの仲間も見られるようになるはずだ。子供たちの格好の遊び場所にもなることは間違いないし、自然観察の森にもなるだろう。そして大地にしっかりと根を張った広葉樹は、きっとこの子供たちの将来と命を守ってくれると思う。

★ ★ ★ ★ ★

富山県を出自とするYKKと称するファスナーの会社がある。確かこの会社の社是には、クリの木の成長を見習って、まず基礎から企業を育てることを社訓としていたように記憶している。まことに自然的に観察して得られた結果を生かしているようで尊敬に値する。目先の利益を追いかけてすぐに金に換えるような企業体質を戒めて、足元を固めてから成長することを教えているのである。このことは今の日本にも当てはまる教訓である。隣国は基礎を固めることなく経済発展のみを優先させてきた。この結果事故と暴動の連続である。

しかし日本でも今から50～60年前は、似たり寄ったりで、列車の転覆事故や火災事故がしばしばあった。最近ではこうした人災は減ってきたが、天災による事故は増えているように見える。

★ ★ ★ ★ ★

小生はクマやシカなどが頻繁に出没する山地には、山の奥にクリやドングリの類を植林することに、国を挙げて努力すべきでだと考えている。クマやシカやリスの餌が豊富にあれば、そうそう危険を冒してまで、里へおりて来ることもなかろうと思う。そして先進国ほど、人間と動物の共存をうまく果たしているように見える。

明治の初頭頃から日本のマタギは自らが危険にさらされるからという理由で、日本狼を絶滅させてしまった。しかしオオカミは日本で唯一の肉食動物であり、この絶滅は100年後の今日、シカやイノシシをここまで殖やしてしまったのである。自然界というものは人間の浅知恵がなければ、きわめてバランスよくすべての生物が、それぞれの命をまっとう出来るように設計されているのである。何の役に立っていないように見える植物や動物も、自然界ではそれなりの役割を果たしていることを忘れてはならないだろう。ノネズミだって、タカやワシなどの猛禽類のエサとして、この地球上に存在する意義がある。人間にとって都合のいいものだけが、この地球上に存在するわけではないということを、改めて知っておくべきだろう。1本の雑草もそれなりの使命を持ってこの地球上で生きていることを、記憶しておくべきだろう。